

## 資料室だより 54

## 音楽大全：II 楽器誌 M.プレトリウス（郡司すみ 訳）

上記のタイトルでミヒャエル・プレトリウス Michael Praetorius (1571-1621)の”Syntagma musicum II: De Organographia 1619”の翻訳がエイデル研究所から発行されている。プレトリウスはクリスマスに歌われる *In dulci jubilo* の合唱曲によってその名をよく知られているドイツ・プロテスタントの代表的作曲家である。それと同時にルター派を代表する音楽思想家、音楽理論家としても音楽美学史上重要な存在なのである。プレトリウスはその祖父も父も兄も神学者であり、彼自身も小神学校に入学しており、神学者の道と音楽家の道を決しかねて悩み、晩年には自分が聖職者にならなかったことを悔いたと言われている。

*Syntagma musicum* は3巻からなり、この翻訳は2巻にあたる。当資料室には *Documenta Musicologica* から出している原典のリプリント版を全巻所蔵しているが、最も興味深い「典礼音楽」に当てられた第一巻は、原文はラテン語であり、今のところ翻訳はこの第二巻の楽器誌のみである。国立音楽大学で長い間、楽器学研究室の所長を勤められ、今は名誉教授になっておられる郡司すみ先生の労作である。

この楽器誌は弦楽器、管楽器、そして何よりも詳しくオルガンについて述べられているのだが、単なる楽器辞典とは異なるのは、すみずみにまでプレトリウスの美学と教会音楽に対する思想が浸透していることである。楽器について説明しながら教会音楽というものを考察するように導くのである。したがってこの楽器誌を見る前に第一巻の聖なる音楽を扱った部分も知ることが望ましい。

彼は、人生の目的を神と一致することに置く。『至高の目的を人間は天使と共有する。そして最高の徳はまことの典礼をもって神を讃えることである。典礼は *theoria*（観想）と *musica*（音楽）から成る。観想は知恵、理性、思考とともに神認識へと至り、音楽は徳、善行とともに神賛美へと至る。そして演奏は聴覚によって知覚する人の水準にゆだねるのではなくヤコブの梯子のごとく上昇する徳としての音楽を目指すのであるから、脱音響性はその本質にある。しかし神が嘉する無響の音楽は教会の典礼の有響の音楽からも立ち昇る可能性がなくてはならない。』という。

第一巻の「典礼音楽」は、1)思索＝コラールおよび詩編唱、2)記憶＝ミサ、すなわち最も大切な典礼、3)解釈＝朝課、晩課などの典礼、4)理論＝教会の器楽論、に分類して論じており実に興味深く、翻訳が待たれる。

翻訳された楽器誌をひも解くと、ヒエロニムス、ヴェルギリウス、旧約聖書などから様々な引用や比喩を用い、また実際の問題として寒い場所から暖かい場所に移したときの楽器

2003/10/9

の問題などにも触れ、読み物としておもしろいものになっている。

本論の前に次のような謝辞としての祈りがある。

「憐れみ深く、慈愛そのものの神よ、この無常の生のなかで太祖アブラハム、預言者、使徒、そしてその他の敬虔なキリスト教徒の崇高な祈りと賛美の歌を（時として混乱がないわけではないが）様々な合唱のなかに配置し、舌足らずに歌い始めた我々をお助けください。やがて近づいてくる永遠の生、崇高で永遠なるもの、喜びに満ちた天にまします我らの花婿イエス・キリストのもとですべての天使が天上の歌と、このうえなく完成された音楽と共に神の小羊の玉座に立って絶えることなく歌い続け、その声は我々の称賛と歓喜の声と入り乱れる。 Sanctus sanctus sanctus, Dominus Deus Sabaoth」

（杉本ゆり 記）